

学校・園部門 地域に学び，自己の生き方を考える児童を目指して

～6年生：「NIIGATA 光のページェント」への12年間の協力活動を通して～

新潟市立笹口小学校 校長 田村 篤

1 はじめに ～12年間、引き継がれてきた学び～

「寒い新潟を少しでも暖かくしたい。」

「そして何より子どもたちに夢を与えたい。」

新潟市の冬の風物詩ともなっている「NIIGATA光のページェント」は、今年で31年目を迎える。この催しがスタートした頃の光のページェント実行委員会（以下、実行委員会）の願いが上記囲みの言葉である。このねらいに感動した6年生が、自分たちにも何か協力できることはないかと考え、総合的な学習の時間で取組を始めたのが2007年のことである。以来、12年間にわたり当校の6年生が協力活動を継続し、年を追うごとに取組内容が変化・発展してきた。見るイベントから参画するイベントへと変容していく積み重ねの中で、実行委員会と子どもとが感謝し、感謝される互惠関係を築きながら活動は現在に至っている。

2 当校の特性と取組の構想

当校は、家庭の過半数を転勤族が占めており、将来、新潟市に住み続ける子どもは多くないと予想される。一方、今まさに暮らしている当校区では、地域のコミュニティづくりと未来のまちづくりに携わる人々の活動が、地道に展開されている事実がある。そうした活動に取り組む人々の思いや願いを知ることで、まちに対する理解を深め、人と人とながらよさを子どもたちに実感してほしいと考える。そして、ひとときでも住んだ笹口のまちをふるさととして、感性の瑞々しい児童期の心に刻んでくれることを願っている。

そうした観点から、当校の生活科・総合的な学習の時間では、地域素材を中核的な教材として扱っている。地域に学び、地域に生きる自分に目を向けていくようにすることで、今次の学習指導要領改訂で求められる「社会に開かれた教育課程」を目指すのである。

とりわけ、6年生では目に見える地域の人・もの・こと背景に、目に見えにくい大切なもの（思いや願い）があり、それに気付いていく学習を大切にする。それが「生き方を考える」という総合的な学習の時間の第一の目標を達成することにつながっていくと考える。

3 取組の実際

(1) 実践例「過去に学び今年を考える」(4～6月)

今春、6年生に進級した子どもたちは、まず、これまでの歴史を知ろうと、4代目となる光のページェント実行委員長や副委員長、現在、大学生となっている先輩(2010年度卒業)、過去に6年生の指導に当たった教諭等に話を聞いた。



正副実行委員長の話を聞く

そして、それぞれの人や各年度の取組に底流していた思いや願いに気付いていった。とりわけ、実行委員長の「人々の笑顔が、自分たち実行委員のやりがいです。」という言葉に共感した子どもたちは、「思いや笑顔を輝かそう」を各班の活動に共通するテーマに据えた。

先輩たちの取組を引き継ぎつつ、今年らしい取組をしようと考え出したのが以下の内容である。

テーマ	取組の内容
けやきの木	けやき通りクリーン作戦，紹介クイズ・しおり作り等
宣伝	ラジオ出演，ポスター，リーフレット，HP作成
LEDライト	作製者等のビデオ紹介，カプセルLED飾り
ウェディング	新郎新婦に歌とクロックボードのプレゼント
スイーツ	農家さんや専門学校と共同製作(マドレーヌ)
グッズ	ランチョンマット，コースター等の製作

また、「毎年、ホットワインや豚汁を出しているけれど、実のところそれだけでは淋しいんだよね。」という副実行委員長の言葉や、「本当にやりたいことを自由に考えていいんです。できないところは素直に大人の協力を求めてください。」という先輩の言葉に触発され、初めての活動に思い切って挑戦する子どもも現れた。具体的には、5年生の時に授業をしていただいた農家さんの産物（コシヒカリ，ルレクチュ）を活かし、校区にあるシェフパティシエ専門学校と協働してスイーツを提供するグループの登場である。また、LEDライトを作製したり取り付けたりする方々の

思いを調査するグループも現れた。

(2) 実践例「オリジナルの楽曲づくり」(7~11月)

例年、点灯式では子どもたちがコーラスを発表してきたが、今年は既成の曲ではなく、けやき通りへの願いや思いをオリジナルの楽曲として表現したいという声が上がってきた。しかし、オリジナルの楽曲をつくるのはたやすいことではない。思いやイメージはあるものの作曲・編曲の技能をもった子どもはいない。先輩の言葉にあった「大人の協力」を手がかりに協力者を探し、新潟市出身のピアニスト・作曲家である遠藤征志氏¹⁾が力を貸してくださることになった。

7月、子どもたちは、けやき通りに対する思いをプレゼンテーションにまとめ、楽曲のイメージを遠藤氏に伝えた。遠藤氏はプレゼンテーションの中に埋まっていた「幸せな気持ち」「人々の思いや願い」「笑顔あふれる場所」「人と人をつなぐ場所」「思い出に残るふるさと」「いつまでも友だち」などのキーワードをひろいつつ、けやき通りにかかわるすべての人が、自らと結びつけて光のページェントをとらえられるようにと考えながら、歌詞と曲にまとめてくださった。

10月下旬、遠藤氏より完成の連絡があり、さっそく楽曲との出会いの機会をもった。秋晴れの空から澄んだ朝陽が射し込む音楽室に、子どもたちの思いの詰まった歌詞がゆるやかなメロディにのって流れた。「けやきの想い」(資料参照)と題された曲の美しい響きに思わず涙ぐむ子どもの姿もあった。担任から感想を求められた子どもたちは、しばらく何も言うことができなかつた。感動が深すぎて、言葉にできないように見えた。



遠藤氏の伴奏で練習が始まる

歌詞を考えるのは国語の学習であり、合唱練習は音楽の学習でもある。遠藤氏との出会いと心震える感動は道徳に通じる出来事でもあった。今次改訂で総合的な学習の時間には「教科等横断的な」学びが一層求められるようになった。オリジナルの楽曲づくりは、「各教科等で育成する資質・能力を相互に関連付け、実社会・実生活において活用できる」場となっていた。

(3) 実践例「実行委員会への提案」(9月)

各プロジェクトの活動アイデアがまとまりを見

せた頃を見計らって、実行委員会の方々にプレゼンテーションをしてアドバイスをいただく機会を設けた。自分たちの企画がどのように評価されるのか、子どもたちは緊張の面持ちで発表の日を迎えた。実行委員の方々からはプレゼンテーション後、以下のようなアドバイスを受けた。

<要望や改善点に関する指摘>

- ・グッズ販売は、毎年すぐに売り切れてしまうから生産量を増やしてほしい。
- ・ポスターやチラシは街に貼るだけでなく、保護者や身近な大人にも配ると効果が出るはず。
- ・クイズで当たったら、ご褒美がほしいと思うのが自然な心理。何か準備してほしい。

<取組の甘さを突いた指摘>

- ・協賛金づくりというかたちで取り組みたいなら、原価や売り上げ数から逆算して単価設定をしなければならない。何となくの価格ではなく、しっかり考えること。
- ・テレビやラジオなどのマスコミに出たいけど、自分たちではどうしようもできないと言っていたが、「出演させてください」と手紙は出せるはず。

<励ましや意味づけ、協力の申し出>

- ・地域の産物を使って食べ物をつくるのは、これまでになかった良い考え。
- ・LEDを作る人と付ける人といった裏方の人を取り上げるスライドショーはよいアイデアだと思う。
- ・HPで宣伝するなら、英語でも発信できるといい。世界中の人が見ることができる。実行委員も協力する。

温かい賞賛・激励と厳しい指摘とは表裏一体のものであり、それは大人の本気がもたらすものだったといえる。それに応えるように子どもたちの表情には真剣さが増し、やる気に火がついたように見えた。



「厳しいことも言われた 実行委員から本気の指導をいただくけど、もっともだなと思う。実行委員会の人たちや参加する人が喜んでくれるようにもう一度グループで話し合いたい。」

こうした振り返りが示すように、構想を具体化する道筋に気付かされたり、ぼんやりしたゴールイメージが明確になったりして、さらに考え、活動する必然性が生まれてきた。一例を挙げれば、当初予定にはなかつた、応援活動を英語で発信することになった宣伝班では、必要感に基づいた熱心な英語学習が展開されることとなった(右図)。



(4) 実践例「LEDを作る人・付ける人への取材と紹介ショートムービーづくり」(10~11月)

今年度が初めての取組となるLEDライトに関係する人々への取材を行った。LEDライト本体は「ファースト」という福祉施設で作られていることがわかり、現場に向かった。作業工程をビデオに収録しながら、一つ一つ手作業で心を込めて作っている



方々の真剣な表情に子どもは引き込まれていった。作業を見学し、丁寧な仕事に驚くような思いで細かい作業に取り組んでいるのかを尋ねると、「たくさんの方に見に来てほしい。」「ほんわかした気持ちになって、幸せになってくれれば嬉しい。」とのことだった。

どの作業も楽なものではないことを実感した子どもは、綺麗な光が灯る裏で、大変な作業が展開されていることをつかんでいった。

また、LED取付の高所作業をする人にも取材を行った。200本超の木々の梢に約26万球の電球を取り付けていく作業は見るからに簡単ではない。「天候の関係もある中、毎日一つ一つ丁寧に取付けてくれてありがたいし、すごいと思う。」と子どもは感想を記している。

ここでも、どんな思いで仕事に取り組んでいるのか訊いてみると「駅南に来て、このイルミネーションが点いてきれいに通りが光っているのを見て、わー！と喜んでいる人の姿を想像しながら付けています。」という言葉が返ってきた。

実行委員会の人たちと水脈を共にする思いや願いが、作る人にも付ける人にもあることをつかんだ子どもは、普段目にする事のない人々の営みをしっかり伝えたいと、編集作業に一層力を入れることになった。

(5) 実践例「点灯式を盛り上げよう」(12月)

「ここまで活動ができたのは実行委員会の方や先生方のおかげだから、その人たちを笑顔にしたい。」

「お客さんに、来年も来たいと思ってもらえるように丁寧に接したい。」

「家族に感謝の気持ちを伝えるために一生懸命取り組みたい。」

など、子どもたちは一人一人自分のめあてをもって点灯式当日に臨んだ。

笹口小学校用のブースでは用意したマドレーヌや記念品グッズが飛ぶように売れ、売れ残りの心配は杞憂に終わった。

また、ショートムービー上映の前で立ち止まり、熱心に視聴する人々の姿も見られた。

点灯式のステージでは6つの班の取組が大パネルなどを使って発表され

た。その後、練習を重ねた二部合唱曲「けやきの想い」を遠藤氏の伴奏で披露した。夜空に響いた歌声に大きな

拍手が寄せられた。セーフティスタッフとして巡視をしながら参観していた地域の方は、後日、以下のような感想を寄せてくださった。



専門学校と協働したマドレーヌ販売



LEDに関わる人々のビデオ上映



心を込めた二部合唱

心を込めた歌声に思わず涙が出ました。特に歌詞の中の「10年後も、20年後も」のメッセージに感動しました。これまでの取組の発表も内容が濃く、調査や取材をよくしていたことが分かりました。子どもは大人の世話になるのが普通ですが、今回は逆に子どもたちから地域に貢献してもらえて、それが街の活性化につながっているのを見て、胸がいっぱいになりました。

地域の方々に喜んでいただいた一方で、子どもたちは以下のような振り返りを記していた。

「大勢の人に、私たちの伝えたい思いを届けられたのでやりきった気持ちがあります。」

「これまで他人事だったページェントが今年は自分事になりました。」

「苦勞した分、楽しくて、すがすがしい気持ちになりました。」

今年も子どもたちの成就感・満足感・達成感に溢れる点灯式となったことがうかがわれる。

4 取組の成果と課題

(1) 成果

① 地域を愛し、誇りに思う子どもの姿

「自分のことを脇に置いて動いている姿がとてもカッコイイ大人だなと思った。私も相手を思って動け

る人になりたい。」

「人のためなんて嘘だと思ったこともあったけど、本当にお金のためなんかではなく、やりがい大切にしている人たちはすごいと思いました。」

これらの言葉が示す大人への共感や憧れは、地域の人々を誇りに思う気持ちと同義といってよいだろう。

「大人になったら実行委員として戻ってきたい。」

「自分が大人になったら子どもに話したい。」

「これからもこの活動と歌を続けてほしい。」

「今までと違う、見たことないような灯りに見えた。」

後輩に引き継がれることへの期待、この場に戻ってきたいという願い、そして地域のイベントが以前と違う存在となって胸に迫った感動、これらは地域への愛着が深まった姿を表しているといえるだろう。

前述した先輩からも以下の感想が寄せられた。

…そわそわしている6年生や先生方の様子を見て、自分の12歳の頃を思い出し、泣きそうになりました。(中略)我が光のページェント!と、何年も前のことなのにとっても誇らしく思っています。私が感じたような懐かしさや喜びをもっと多くの卒業生たちに味わってほしいと感じました。…

卒業後8年経ってもなお彼女の心の中に光のページェントは特別な存在として残っていることがうかがえる。12年間続いた取組は、それぞれの子どもの中に地域への愛着と誇りを刻んできたようである。

② 生き方を考える子どもの姿

「協力とは、一人で突っ走らず、一人一人の話を聞いて布の編み目のように手をつなぐことで、一人よりもっといいものができることだとわかりました。」

「人の思いとか、誰かのために…というものはすごい力をもっているんだと、とても感じた。思いがあれば行動に出る。行動が変わる。」

「感謝しきれないほど多くの人と一緒に考えたり行動してくれたりして本当に嬉しかったです。今度は、私が何かの役に立つようにする番だと思います。」

「実行委員や大人の姿から学んだのは、好きなことをつきつめることと全力投球です。自分も本気で取り組める仕事につきたいです。」

点灯式後の振り返りで子どもたちは上記のような言葉を記していた。真剣に取り組む大人の姿に触発され、自分たちものめりこむように取り組んでいった活動の果てに記した言葉である。これらは間違いなく、総合的な学習の時間の第一の目標に示された「生き方

を考える」姿を物語るものであった。

(2) 今後の課題

① カリキュラムの評価・改善

12年間の継続を経て当校の教育を特徴付ける取組に育った6年生の総合的な学習の時間は、5年生以下の児童にとってあこがれであり、自身の出番が巡ってくるのを期待して待っている。その気持ちを生かしつつ、6年生時の活動につながる資質・能力を育むように生活科・総合的な学習の時間のカリキュラムの評価・改善を続ける必要がある。

② 卒業生の参加を地域活性化につなぐ

光のページェントに積極的に関わり始めた当初の6年生児童は、現在23歳になっている。SNS等を利用して参加を募り、卒業生による光のページェントファンクラブを創設することが考えられる。児童と大人の活動になっている現状に地元出身の若者の加入を生み出せば、地域の一層の活性化につなげていくことができるだろう。

③ 楽曲を次年度以降に活かす

今年度創作した楽曲を実行委員会に寄贈し、来年度に実施を検討しているというクラウドファンディングのリターン材に活用してもらうことも考えられる。また、光のページェントのホームページから楽曲を配信することで次年度以降もイベントのテーマソングとしてつないでいくことができる。

5 おわりに

転勤族の多い当校であるが、現在住んでいる笹口を愛する気持ち、翻ってその気持ちが、この地を離れたとしても今後住まう各地において、その地域を愛し、人と人とのつながりを大切にする姿勢につながっていくことを期待する。「けやきの思い」がこれからも歌い継がれることを祈りながら、この歌を耳にしたとき、懐かしい記憶が呼び起こされ、「ふるさと笹口」への思いを温めてくれることを願ってやまない。

1) 遠藤 征志 (えんどう せいじ)

1978年 新潟市生まれ ピアニスト・作曲家・編曲家

2012年 ピアノ・ソロ・アルバム『桜瞑想曲』

2016年 ピアノ・ソロ・アルバム『Circle for peace』

2017年 東久邇宮記念賞, 文化褒章を受章